

向 一陽著 『奥アマゾン探検記』

この地球上に秘境・辺境と呼ばれる地域は沢山あるが、南米大陸の大部分を占めるアマゾン川やオリノコ川のジャングル地帯ほど未だ未だ辺境の度合いを色濃く残している場所はないのではなかろうか。鉄道や道路などの交通網は全く無く、数千本に及ぶアマゾンの支流が絡み合った熱帯ジャングルの川筋をボートで辿って行くしかないという地球上で最も孤立した地域である。

また、地球環境の面でも広大な水と緑が残された大地であり、地球上の全ての生命が生きて行く上に不可欠な酸素を供給してくれる生命の泉でもあろう。

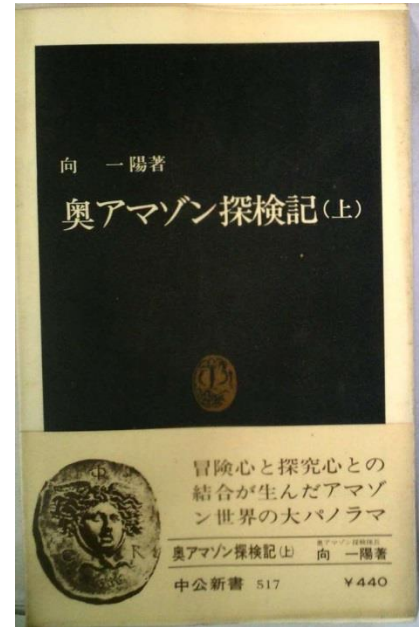
近年、大資本による大規模開発計画、金鉱などの不法採掘による環境の破壊、それによって惹起された先住民の暮らしへの圧迫や部族間闘争、外部から持ち込まれた病原菌による病気の蔓延、政府の先住民同化・隔離政策による彼等の歴史と固有文化の喪失など種々の問題点が指摘されているが、この広大な熱帯ジャングルにはいまだ外部社会との交渉を持たずそれぞれがひっそり心豊かな暮らしを営んでいる多数の先住民族が未だ未だ多数存在しているそう。その先住民族の部族数は100とも200とも言われ、人口は50万人とも100万人とも言われている。

本書は、半世紀前の1970年代に足掛け3年間をかけてベネズエラ、コロンビア、エクアドル、ペルー、ブラジル、ボリビアの6ヶ国にまたがった南北3300キロ、東西1500キロのアマゾン・オリノコ川流域を、ベネズエラの首都カラカスからボリビア南東部のサンタクルスまで、アマゾンに北から南まで切れ目のない1本の線を引いて踏破した探検の記録である。踏破した距離は1万6千キロに及び、アマゾン探検史上初の完全踏破であった。全行程の内、その9割がボートやカヌーでの川伝いであった。

アマゾンの探検レポートや取材放映などは、現在でも猟奇的な題材が多いが、本書は先住民の暮らしぶりや習俗なども冷静な客観的な目で観察されており、それらの報告記事に通底しているのは太古の昔からこの孤立した辺境で住み続けている先住民族への敬意と、あるがままの彼らの暮らし方への理解であろう。また、先住民に関する民族調査だけではなく、随所で植物・動物・地象・水象・気象などの調査も行っており、アマゾン流域の一大地誌ともなっている。

この探検隊は新聞社や特定企業からの援助を受けたとはいえ国や大学などの公式な探検隊ではなく、著者の計画に賛同して個人的に集まった研究者や冒険好きの謂わば個人的な探検隊であったが、半世紀も前の日本が未だ復興期の途上にあった時代によくこれだけの偉業がなしとげられたものと感心せざるをえない。

中公新書（上下2冊）1978年刊



[「山書の小溪」目次に戻る](#)